

ムラの国際交流と地域再発見ー里人の多様な潜在能力の気づきー

山形県内陸北部に位置する角川の里は、野菜の恵みが今シーズン最後の最盛期を迎えている。今年はナス、キュウリ、エダマメが豊作だった。また普段はタヌキに食べられてしまうことが多かったスイカも比較的被害が少なく、筆者もおいしいスイカにありつくことができた。

そんな恵みにあふれた今夏、角川の里では思いがけない出会いの機会があった。韓国の子どもたちの2回にわたる来訪である。ソウルに本部を置く「韓国青少年連盟」では毎年多くの韓国の子どもたちを日本に派遣している。これまで都市部を中心に派遣することが多かったが、これからは日本のふるさとを体験させてみたいということで、初めて東北地方を訪れることになったのである。角川の里には1泊2日の行程、小学4年生から6年生までの子どもたち50名ほどが里山散策や川遊び、農家ホームステイ体験を行った。

ソウル周辺の都市部の子どもたちは、田舎の自然や文化、特に田んぼや川の生き物たちに心ひかれたようだった。田んぼで泥だらけになったり、川でびしょびしょにぬれたりして遊んだ。生き物を見つけると玉網を握りしめて歓声を上げ、どこまでもカエルやイモリを追いかけていく姿が微笑ましかった。地元のおじさんたちは、韓国の子どもたちに対しても村の伝統的な教育方法、すなわち実際に自分でして見せることによって、農作業や山仕事を教えていた。また、子どもたちからは韓国太鼓の演奏やテコンドーの武技の披露がされ、集まった角川の住民も交流をととても楽しんでいたようだった。

筆者にとっては今回、異なる文化圏の外部者を受け入れることで、韓国人よりはむしろ地元角川の里人の多様な潜在能力を再発見したことが新鮮だった。交流会では、地元お母さん方の踊りや民謡が披露されたり、地元小学生による和太鼓が演奏された。角川は一見すると地味なムラというイメージがあるが実はこんなに芸達者なムラだったんだなあと驚かされる。地域案内や体験活動の際には、言葉の壁が問題になると思われたが、地元には韓国や中国の朝鮮族出身で韓国語を話すことが出来るお母さんが何人もおり、それほど問題にならなかったようだ。小さなムラではあってもいろんな特技や特性、背景を持った方々が住んでいることが浮き彫りになったのである。以前、宮城県の蕪栗沼で渡り鳥の保護と里地里山保全活動を行っている呉地正行さんがこんなことを言っていたのを思い出した。「地域活動には生物多様性ならぬ人間多様性がとても大切なんだ。」

今回の韓国の子どもたちの受け入れは地元の方々にとっても、「あの人はこんな踊りができたんだ」「あの子どもは和太鼓をやっていたんだ」「あのお母さんは韓国語が話せたのか」などの再発見があったようである。このことは地域内コミュニケーションが活性化するきっかけにもなるだろう。ある有機農業活動家がこんなことを言っていたのを思い出す。「誰かから見られることは、自らを見ることでもある。」地域を見つめなおし、そのことによって地域内コミュニケーションが活性化する。それが新たな地域づくりへの扉を開くのだ。

昨今盛んになっているグリーンツーリズムの議論はともすると経済的なことのみが着目

されがちだ。だが実はムラが外部と交流することで得られる本当の効果というのはこんなところにあるのかもしれない。すなわち住民自身が自分の地域の人間多様性にあらためて気づきその力を認め合いムラづくりのために引き出していくよすがを作り出していくことだ。これは次元を国に置き換えても言えることなのではないかと思う。自分たちのことを見つめなおすことを怠り、相手のことばかりをとやかく言うことが多い昨今、こうした交流から学ぶことは多い。